

# 幼児の創造性の広がりと学生の学び

## 幼稚園児と学生のコラボレーション活動実践事例を通しての考察

戸潤 幸夫

An expanse of the originality of the young children and the learning of the students  
The consideration through the collaboration activity practice example of kindergarteners and the students

Yukio TOMA

### I はじめに

県立新潟女子短期大学幼児教育学科の表現「造形活動」に関するカリキュラムは、図画工作、デザイン、絵画制作、造形、保育内容の研究「遊びと造形」の演習5科目である。

演習科目の学びによる教材、技法、道具の取り扱いなど造形活動経験は豊かにも関わらず、教育実習の研究保育における造形活動の遊びでは、遊びの展開や園児へのことばかけ、子ども達の発見したことや取り組んで身につけたことなどの共有化やまとめが弱いと感じた。また、発達段階に応じた教材の与え方やその活動を通して子ども達に何を気づかせたりどんな表現を引き出したのかあいまいなところを多く目にした。

そこで、現場に役立つ実践力を身につけさせるため、演習内容に県立新潟女子短期大学附属幼稚園（現新潟県立幼稚園）の園児と共同制作をしたり、指導者の筆者がワークショップのように活動の支援をしているところを観察させたり、学生の中から支援者を決定し活動を展開する方法などを取り入れた。そして、発達段階に応じた教材化の仕方や導入の仕方、展開時のことばかけの方法、まとめでの共有化のあり方などを具体的に学ぶ機会とした。また、子ども達の創造性がどのように働き、自分の思いや願いをどのように具体的に表現に結びつけるかなども学べるようにした。これらの活動の中から三つの実践事例を通して園児の創造性がどのように拡充され、学生の学びにとってどのように効

果があったのかを考察することとした。

### II 実践事例紹介

#### 1. 実践事例1

##### (1) テーマ

「動物と人が楽しく生活する楽園を描こう！」

##### (2) 活動する人

附属幼稚園5歳児と「絵画制作」受講生33名

##### (3) 活動のねらい

子どもは人と動物、人と植物の区別をせずに愛する。そんな心をさらに大切に育むのがこの活動の大きな目的と言える。人と動物、植物が楽しく一緒に暮らしている楽園を園児の思い思いに想像したことを描きながら、友達と協力して大きな作品を作り上げることがねらいである。

##### (4) 活動日 2008年5月13日（火）

10：15～11：15

##### (5) 活動場所

県立新潟女子短期大学附属幼稚園多目的室

##### (6) 準備するもの

黒色サインペン 36色パステルセット

##### (7) 活動内容

###### ① 導入

・ルソーの画集の中から「夢」という作品を子ども達に見せながら、その中に描かれているものを問い、子ども達に楽園のイメージを想起させる。



写真1 導入場面



写真2 ルソー作「夢」

② 展開その1「線で形を描く」

- ・ゼミ生が事前に大きな紙の中央に写真3の絵を黒いサインペンで描く。



写真3

- ・写真3のように、最小限天地が理解でき、描くきっかけ作りに、山の稜線、太陽、河、木1本、人と牛、家1軒を描くことで、子ども達の創造力をかき立てる。
- ・園児は、描かれた写真3の絵の周りにどんどん思いついたことをサインペンで描き足していく。
- ・事前に木や草、動物、人の描き方の参考として、学生が四つ切り画用紙に描き、壁面に貼り、園児が鑑賞できるコーナーを設置する。



写真4



写真5

- ・初めは、自分の周りに自分の描きたいものを自由に描いていたが、少しずつ周りの人の描いたものにヒントを得ながらイメージを広げていることが写真5で伺える。

③ 展開その2「パステルで色をつける」

- ・線描が完成したらパステルで着色し、ティッシュで擦りながら淡い色彩を付けていく。
- ・パステルは色数が多く、同じ葉っぱでもいろんな色で描くと変化が生まれることに気づかせる。



写真6



写真7



写真8 完成作品

- ・写真6では、36色のパステルの中から塗りたい色を選び、そっと着色しティッシュで擦って色を広げるとふあっとした色彩が生まれることに感動し、夢中になって着色していることが伺える。
  - ・写真7では、みんなが協力して大きな紙に描くことで、今まで経験したことのない完成の喜びや作品の美しさを感じ、子ども達一人ひとりが自己有能感を味わっている様子が伺える。
  - ・写真8のように、完成作品を立てて全体像を子ども達に見せた。子ども達から自然に拍手をする姿が見られ、画面を寝かして見ていたのとは違う新たな感動を覚えた様子が伺えた。
- (8) 実践事例1のまとめ
- ・学生は、5歳児でも子ども達の興味関心のある題材であり、それまでの経験を生かしイメージが想起できるテーマを与えること、導入の工夫、大きな画面、はじめて使うパステルという描画材料など環境構成することにより、子ども達の一人ひとりの個性と主体性を引き出し、想像以上の充実した作品を完成させることができることを体感した。今後の保育に役立つ活動であったことが、学生の感想文の中から上記の点が記述されていたことから読み取れた。

## 2. 実践事例2

### (1) テーマ

「光の絵の具で描いて、ブラックライトに照らして遊ぼう」

附属幼稚園年中さくら組園児とコラボレーションして、クリスマスパーティごっこをしよう

### (2) 活動のねらい

4歳児のこの時期は、線で形を描くのが大変

楽しく感じる時期といえる。また、12月は子ども達にとって楽しみとしているクリスマスがある。

街は、イルミネーションで光があふれている。大好きなクリスマスのことを想像して、思い思いに表したいことを自由に光る絵の具で表し、ブラックライトに照らした不思議な世界を十分に楽しむことがねらいである。

(3) 活動日 2008年12月12日(金)

10時から11時30分

(4) 活動場所 県立新潟女子短期大学

附属幼稚園多目的室

(5) 活動する人 附属幼稚園4歳児30名

保育内容「遊びと造形」

受講生及び戸潤ゼミ生

(6) 当日の活動準備

① ビニールシートを敷く

② 蛍光絵の具70%水30%の割合で混ぜた絵の具を準備する

(7) 活動内容

① 導入と活動の説明(ゼミ生の中の担当者が行う)

- ・あらかじめゼミ生がベニヤ板大の段ボール2枚に描いたAのサンタさんのプレゼント袋の中身、Bのクリスマスツリーの飾り、Cのケーキやテーブルの上の料理などを思い思いに想像し、のびのびと描いて遊ぶ活動であることを説明する。

### 絵を描く時のお約束

1. 6本の絵の具を見せながら、最初に好きな色を選んで筆で描くことを説明する。失敗してもぐちゃぐちゃ上から塗らないようにする。
2. 色を変えたい時は、しっかり筆を洗ってから別の色を筆に付け描く。混ぜると汚くなることを説明する。
3. 絵の具をこぼさないように、コップをしっかり持って描く。
4. 絵の具が服に付くと落ちにくいので、周りの人に付かないようにすること。描いた絵の上に乗ると、服に付くことも注意する。



写真9 A



写真10 B



写真11 C

## ② 展開

- ・ A、B、Cの画面を見て、園児自身が興味のあるプレゼントやケーキなどの料理、ツリーの飾りなど描きたいものを選択し、自由に思い思いに描きたいものを描く。今まで経験したクリスマスのことを想起し、もっと今年のクリスマスが楽しいものになるよう願いを込めて描いていく。
- ・ A・B・Cの画面全体に描くところがないくらいにスペースが埋まり、まだ描くことに夢中になっていた場合、絵皿やダンボール箱などにも描いて遊べるように材料を用意しておく。
- ・ 完成後画面を立て、ブラックライトの照明が当てやすいようにセットし、窓の暗幕を閉め電気を消す。
- ・ ブラックライトで作品を照らす。十分堪能し

たところでブラックライトを消し、会場の照明を付け明るくする。



写真12

- ・ クリスマスの絵が完成し、一旦照明を落とし真っ暗にした後に、一人の学生が魔法の言葉を言い、その瞬間ブラックライトを点灯した。しばらく沈黙が数秒続き、次に子ども達の驚きの声がどよめきのように起こりその美しさに大変感動している様子が伝わった。

## ③ まとめ



写真13

- ・ ブラックライトに照らされた自分たちで描いた作品のすばらしさに十分園児が堪能したところで明かりを付ける。その後授業担当者(筆者)が、この活動で園児一人ひとりの表現に込めた思いや工夫したところを説明し子ども達を褒めた。そのことで、自分たちの発見したことや工夫した表現方法を園児全員の成果として共有化できると考えた。このことにより園児達の活動の価値が再認識され自己有能感が高まり、園児自身の表現に対する興味や自信につながると考えた。
- ・ 3歳児、5歳児クラスも鑑賞に訪れ、ブラックライトで照らされることにより、絵の具で描いた部分だけが黒い画面から浮き出ることの驚きやネオンサインのような発色の美しさに「すごい」などの歓声を思わず発し、4歳児は誇らしげであった。

(8) 実践事例2のまとめ

この題材のよさは、園児にとって最も関心の高いクリスマスをテーマになっていることである。クリスマスは一年で一番楽しい行事の一つであり、それは園児が想起しやすいものである。そのため、ABCの画面から描きたいものを選択することも容易に行われていた。表したい内容もはっきりしていて太筆でぐいぐい力強いタッチで描いていた。描きたいものがたくさんあり夢中になって描いていた。

予備として用意していた絵皿や段ボール、発泡スチロールの梱包材にも次々と描いていった。タイムリーな題材には、このように興味を持って楽しく活動することが学生に理解できたと思われる。また、活動に夢中でまだ描き足りない状況時には、予備題材や材料を用意しておく必要性も学べたものと思われる。

3. 実践事例3

(1) テーマ

「ペットボトルでつくった花の立体造形の代わりに、テーマパークを描こう！」

ブラックライトに照らされた驚きの世界

(2) 活動対象

新潟県立幼稚園のさくら組（4歳児）園児と  
幼児教育学科2年生

(3) 活動日 2009年11月20日（金）

10：20～11：30まで

(4) 活動場所 新潟県立幼稚園多目的ホール

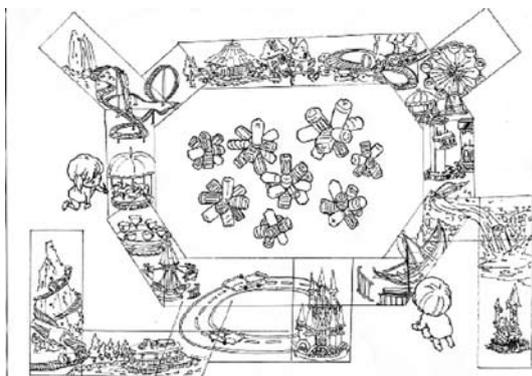


図1 完成イメージ図

(5) 活動のねらい

園児にとって遊園地の思い出はたくさんあり、その思い出では大切なものと思われる。そんな園児が夢の遊園地を思い思いに想像し、長い紙をつなげながら描くことは楽しい活動となり描く

喜びを味わうことができる。学生が作成したペットボトル造形と一緒にブラックライトに照らして見ることは感動がより大きくなり、教育実習で築いた園児との人間関係もより深められると考えた。

(6) 準備するもの

[県立短期大学側]

ブルーシート ブラックライト ロール画用紙 蛍光絵の具 ペットボトル造形 延長コード 新聞紙 雑巾 セロテープ ガムテープ パレット代わりのトレイ

[幼稚園側] 太筆

学生・園児とも汚れてもよい服装

(7) 活動内容

- ・ブルーシートを床に敷く。 学生
- ・ペットボトル造形を配置する。学生
- ・蛍光絵の具の準備をする。 学生
- ・園児が入場する。 10：20頃

① 導入

- ・活動支援者（授業担当の筆者）が、活動内容を園児に説明する。



写真14



写真15

② 展開

- ・ペットボトル造形の周りにロール画用紙を並べてつないでいく。図1のように並べるのは園児の自由な発想で、つなぐのは学生が行う。

- ・園児が描きたい色を選択し、あらかじめ蛍光絵の具70%と水30%の割合で調整したものを学生がトレーに入れる。



写真16

- ・子ども達は描きたい場所で、自由にテーマパークを想像し描く。学生は、園児が発想できるようにお話を聞いたり一緒に描き出す。時間に余裕があり、意欲が持続していたら、さらに紙をつなげて描かせる。



写真17

リラックスして自由にのびのび活動していることが伺える。



写真18

想像力を働かせながらぐいぐい描いている。



写真19

腕をいっぱい伸ばして思い思いに描いている。



写真20

園児個々の活動から、紙がつながることでイメージが共有化された活動が生じてきている。



写真21

点描が美しい効果を上げている。



写真22

写真18の段階から紙をつなげて、さらにイメージを拡充し、主体的に活動していることが伺える。



写真23

写真22の園児が描いた部分を、他の園児が描き加えたり色を重ねて作品を深めている。



写真24 描く活動が終了した場面



写真25

暗幕、ブラックライトの準備ができた後、学生が「チチンパイパイ」とみんなで声を揃えて呪文を唱え、作品がすてきに変身することを説明している。

③ 作品鑑賞



写真26

・制作物を照らして鑑賞する。



写真27

自分たちが描いた遊園地の様子を、歩きながらどのように変身して見えるのかを確かめ楽しんでいる。

④ 活動のまとめ（授業担当者の筆者）



写真28

活動をふりかえり、どんなところが楽しかったのか、どんな工夫をしながら描いていたのか、ブラックライトに照らされた作品を見たときの感想などを園児から積極的に発言がなされた。

⑤ 学生の演習記録カードの記述から

A. 活動中の子どもの様子（発言内容を含む）

- ・機関車を描いていたのだが、線路を友達の描いたものとつないだり、急カーブを作ったり思い思いの線路を描いていた。
- ・筆を洗う水が汚れていて「お水かえる」と聞いたところ、水入れの中で色が変化することを楽しんでいる園児がいた。
- ・「あっ、私いつもより上手にお花が描けた」と言って楽しそうにしていた。
- ・ブラックライトに照らされた作品を見て「わあ、すごい」「きれい」と言って、楽しそうに作品の周りを走り回っていた。
- ・「ビューン」「ガタンゴトン」と声を出しながらのびのびと描いていた。
- ・紙を付け足すことができるので、ジェットコースターをどんどん広げて描いていた。
- ・「観覧車には時計が付いているんだよ」「それに扇風機も付いてるよ」と自分の乗った（見た）観覧車を思い出しながら描いていた。
- ・緑色で塗ったゴンドラの上に青で点々を付け「これ光っているんだよ」と説明していた。
- ・乗り物のイメージを園児に思い出させるため学生が描いたいろんな乗り物がヒントとなっていた。
- ・パレードの参考作品を見て、「かわいい」「ディズニーのベルみたい」と興味をもつ姿があ

った。

- ・自分の思ったことを夢中で描いている姿がたくさんあった。
- ・観覧車を描いた後、その下に人のようなものを描いて「これ観覧車を止める人」と言っていた。
- ・終了間際に園児が「もっと描きたい」と言っていたので大変意欲的に集中していたことが理解できた。
- ・「観覧車の向こうに虹もあるといいかな」と言って描いていた。
- ・活動の支援者（戸澗先生）の話に積極的に関わろうとする姿が印象的だった。

#### B. この題材について気付いたこと

- ・子ども達一人ひとりの作品というのではなく、みんなと共同で作り上げたことが満足度を高めたと感じた。
- ・描き過ぎて絵を壊してしまう場面を見て、頃合いを見て別の紙に描かせるなどの声かけが大切だと感じた。
- ・みんなで描いた絵をつなげて、大きな遊園地ができる喜び、達成感は格別だと園児の笑顔などの表情から感じられた。
- ・いつもより大きな画面に、太い筆で一気に描いていくこの題材は、園児にとってとても楽しい活動であると感じた。
- ・子ども達誰もが楽しかったと思いのある遊園地をテーマとしたことで、表現したいイメージがしやすかったと思った。
- ・一枚の画用紙ではなく、自分の表現したい形に紙を縦長でつないだり、横長にしたり、正方形のようにしたりできたので、自分の思い通りにのびのび表現できるのだと思った。

#### C. 完成作品を見ての感想

- ・みんなが思い思いに描きたいものが表現できた満足感と楽しさが伝わってくる作品となった。
- ・蛍光絵の具の持つ原色に近い色合いは、ブラックライトに照らされ、さらに鮮やかに輝きだし感動した。
- ・コーヒーカップの模様やメリーゴーランドの馬の顔の表情など細部にこだわった表現があった。
- ・学生が蛍光テープで装飾したペットボトルの

造形物と園児が描いた遊園地がマッチし、自分でも行きたくなるようなテーマパークが完成し、とても嬉しかった。

- ・立体的なペットボトルの造形と平面に広がる園児の絵が一体となり、大変幻想的な雰囲気となり、4歳児の作品とは思えないアートな感じがした。
- ・ペットボトルで作った花の造形の周りに、いろんな方向に紙をつないで迷路のようになった遊園地、本当のテーマパークのように「賑やか」で、とても楽しく、わくわくとする体験ができて有意義な時間を過ごせたと感じた。
- ・学生時代にこんな体験ができて、現場で頑張って造形活動を行いたいと思った。

#### D. その他活動全体で気付いたことを自由にお書き下さい。

- ・戸澗先生と園児が活動の初めと終わりにとても楽しそうにお話ししていた。子ども達の気持ちをしっかり受け止め、それに丁寧に答えていた。ちょっとした会話の中で保育者の顔色を伺うことなく園児の思い通りの活動を保証するのは、このような行為が大切と分かった。
- ・保育者のちょっとした声かけで子ども達の創造性が広がったり、やる気生まれるのだと活動全体を見て思った。
- ・保育者とは、子どもの発達段階、興味関心をしっかり分析し、活動全体の流れとその活動に最もふさわしい環境作りができるよう教材研究の大切さを改めて感じる事ができた。
- ・戸澗先生が子ども達との話のやりとりで、子ども達の発想や考えをしっかりと受け止めて、今日の活動のねらいが何か、子ども達一人ひとりにやるべきことがイメージできるように話していたのが大変勉強になった。

#### (8) 実践事例3のまとめ

実践事例1・2は大きな画面に園児がイメージを広げ、描くきっかけになるように最小限の形を学生が最初に描いてあった。そこへ園児が思い思いに創造性を働かせながら描き、一枚の大きな作品を友達と共同して作り上げていった。

実践事例3は、学生がペットボトル造形に蛍光テープでデコレーションした不思議な花の形

をした立体物の周りに、紙をつなげて遊園地を描くというテーマである。園児にとって遊園地は良い思い出のある魅力的な場所である。しかし、ペットボトルの造形物との調和を考えてテーマパークを描いていくこと、つまり立体と平面の構成は、当然4歳児にとって経験もなく意識することは困難と言える。だが、園児が最大限五感を働かせ、ペットボトルの不思議な造形物を見て、「何これ」「おもしろい」「誰が作ったの」と興味を示したことは、この活動の意欲となったことは確かである。紙をつなげて、思い思いの遊具を描いているときも目の前にペットボトルの造形物があり、感覚的に刺激を受けたと思われる。

作品が完成し、会場を暗くしブラックライトに作品が照らされたとき、ペットボトルで作った不思議な花の立体と園児が描いた遊具などが見事に調和し、まさに夢のあるテーマパークがそこに出現したと感じた。園児はみんなで作り上げたことの満足感と今まで味わったことのない感動で自然に会場を歩き回り、仮想のテーマパークで遊んでいるように思われた。幼稚園教育要領の表現「造形」のねらいであるつくったり描いたりすることを楽しむことが達成できた活動であったと思われる。

### Ⅲ 実践事例を振り返っての考察

#### 1. 園児の創造性の広がりと学生との関わり

実践事例1では、導入で学生がルソーの画集の中から「夢」という作品を選び、絵本の読み聞かせのように説明しながらジャングルの中で動物と原住民、熱帯植物が共生している姿を園児達に鑑賞させた。そのことにより園児一人ひとりが楽園のイメージを膨らませていた。また、学生が事前に楽園に生息する植物、動物、原住民の衣装をまとった人、家など形が浮かばない園児のため四つ切り大の絵を描き活動場所の壁面に掲示しヒントコーナーを設置していた。時々描くことに迷った園児が眺めている様子が見られた。

また、大きな画面に川とか空の部分に園児が群がっていたとき、一人の学生が「ここ広く空いているから何を描こうかな」とつぶやいたら、園児が空いているところを探して、画面全体に

園児が広がりをみせ活動する姿が見られた。

はじめてパステルで着色する園児を促すように一人の学生がパステルでお花に色を付けてティッシュで色を広げていると、園児が「お姉さん先生の花きれい！」と言ってその園児もパステルで着色し始めた。他の園児もティッシュでこすると色が広がり、その上から他の色を重ねるといろいろな色ができることを発見すると、どんどん主体的に画面全体に着色していた。初めは、ぬり絵のように形の中だけ着色していたが、学生が空の部分着色し始めると地面など白い紙の地の色が見えないくらいにたちまちパステルカラーが広がった。まさに色つけごっこに夢中となっていた。学生の活動は時にはお手本になり、時には活動の方向付けの動機にとりもんな形で園児の五感を刺激し主体的活動を導いていることを活動を通して感じた。

実践事例2は、クリスマスが近づくと町中がイルミネーションで輝きうきうきした気分になるそんな体験を自分たちで描いた作品でさらに盛り上げたり、夢を膨らませるために蛍光絵の具とブラックライトを用いた題材である。学生がクリスマスの楽しみについて考え、クリスマスプレゼント、クリスマスケーキなどの食べ物、クリスマスツリーのような装飾物の3つが園児のイメージが広がりやすいと判断し、ベニヤ板大の段ボールの板を2枚ずつガムテープで裏から貼り付け、写真9のようにサンタさんが大きな袋をかついでいる絵、写真10のようなクリスマスツリーの輪郭、写真11のようなテーブルの輪郭とケーキらしいものだけ線描きをした。

活動の説明を学生が行い、3つの画面から園児自身が描きたいものを選択し、自分の思いのままに描いて良いことを伝える。また、はじめて使う蛍光絵の具について「絵を描くときのお約束」として徹底した。説明が終わると子ども達は夢中になって約1時間ほど集中して活動していた。日頃ベニヤ板2枚分の大きさの画面に描いた経験が少ないこと、ブラックライトに照らさなくても蛍光絵の具そのままでも原色の鮮やかな色は園児にとってわくわくするような材料であることが伺えた。学生のイメージ作りのための線描きは子ども達の創造力を十分に刺激

し、主体的表現活動に結びついたと考えられる。完成後、魔法の呪文をかけてブラックライトに照らされた作品を見ると、園児の中から「はじめて魔法を使える人を見た」と驚きを言葉に表していた。

表現する喜びだけでなく、ブラックライトに照らして見る作品は、漆黒の中で蛍光絵の具だけ浮き上がってくる感動として園児の心の中でいつまでも忘れがたいものとなった。その感動が園児の各家庭で話題となり、保護者と園児と一緒に楽しむクリスマス会でもう一度おひろめになったと幼稚園の先生方から聞くこととなった。

実践事例3では、学生が表現「遊びと造形」の時間の演習として作成したペットボトルを立体的にお花の形に作成し、ペットボトルの外側を蛍光テープに装飾した作品である。この作品を活用して「不思議な花のあるテーマパーク」を描く園児の活動につなげることにより、園児の五感をどのように刺激し、想像力を働かせて主体的お絵かきごっこに発展させるかがねらいの活動である。園児にとって不思議な立体をはじめに目にするにより、何だか楽しそうなことが今から行われるのだと期待を抱かせることができたと思われる。

一般的に完成作品を園児に見せることは弊害と言われているが、この場合、遊園地にある遊具のいくつかを学生が描いた絵は、テーマパークを想像して描くための手がかりとして大変効果的な環境構成となったと思われる。当然子ども達は見たとおりに描かずその印象を自分なりの表現に置き換え、しかも紙を縦横自在につなげながら表現していく造形行為にとって自分の創造力を発揮するためのきっかけでしかないことは明らかである。

完成した作品を見ると、参考作品を真似た表現は全くなく園児一人ひとりの思いが表出された活動となった。

## 2. 園児との協同による学生の学び

この実践がいかに学生にとって多くのことを学ぶ機会となったかは、実践事例3の学生の演習カードに書かれた記述内容で理解できる。園児が誰かの顔色を伺うことなく自由にのびのび

と活動するためには、保育者と園児の活動前のちょっとした会話のやりとりや導入時の仕掛け、自由に活動するための子どもの動きを予測した環境構成、子どもの実態や季節、興味関心をとらえた題材・教材そのものの力、展開時の活動が停滞しそうなときのことばかけ、最後のまとめとしてその日の活動を振り返って一人ひとりの発見や工夫点を褒めることにより自己有能感を育んだり、やって良かったという達成感が次のやる気に結びつくことを理解した様子が演習カードに記述されていた。

## IV 終わりに

この実践事例を振り返って明らかのように、幼児教育学科の学生が今後保育現場でこの1～3の実践事例をそのまま日々の造形活動に生かすとなれば多くの課題があることは確かである。

この活動は、教材開発に十分な時間と豊富な材料、中心となる保育者と将来保育者をめざして学んでいる学生30数名がサポートするなど人材も豊富にある上で行った活動の実践だからである。

ただ、そのことは4歳児、5歳児でも環境さえ整えれば無限の可能性を秘めていることはこの実践で証明できたと考えられる。なぜならば活動中の園児の姿は制作中のアーティストと全く同じように、自分自身の思いや考えを堂々と表現している姿を多く目にするのができたからである。

また、完成作品は現代作家が表現した作品と遜色がないくらいの完成度だったからである。もちろん、プリミティブな表現であるが子ども達の表現意図がためらいなく表出されていることが最大の魅力となって鑑賞者を楽しませるものとなった。

学生にとってこの活動を通して、豊かな表現とは何か、主体的に活動するとは園児のどんな動きか、夢中になって楽しむとはどんな状態か、五感を働かせ体全体で表現するとはどんなことか現場の保育者でも中々理解できないことを体感できたことは今後の保育活動の財産になるものと思われる。

造形活動がやや苦手と感じている学生が、表現「造形」の持つ子どもの成長に欠かすことが

できない大きな役割に気づき、保育現場で積極的に造形活動が展開されることを期待している。

子どもの表現もアーティストと呼ばれている人達の表現も共通していることは、「感動を、ハートに濾過して、アートに」を表現としてできているかどうかと考える。造形活動の流れを考えると、発達段階に応じてこの流れを理解し展開することにより、造形活動が子ども達にとって価値あるものになることを願っている。

#### <参考文献>

- ・現代世界美術全集「ルドン・ルソー」集英社1971年発行
- ・末永蒼い生・沢田としき「色彩楽」日本ヴォーグ社 1992年発行